５　生活科における環境教育の学習指導事例（第１学年）

環境教育の視点とのかかわり

本実践では、児童が、体全体で諸感覚を働かせながら身近な自然とかかわる活動を繰り返し、その楽しさや心地よさを感じ取ったり、四季の変化に気付いて自然の不思議さやすばらしさを感じ取ることができるようにしていく。

こうした学習活動は、低学年児童の諸感覚を磨いたり、感性を育てたりする上で、また、自然に親しみ、自然を愛する心情を育てるという環境教育の視点からも、大変価値のある活動である。

１　単元名　　あきとあそぼう

２　単元について

(1) 児童の実態

１年生の児童は、２学期に入ると仲良しの友達が増え、学校生活にもすっかり慣れて、休み時間には一層元気よく校庭で遊ぶ姿が見られるようになってきた。夏休みには、自然の多いところへ出かけて自然と触れ合ったり、虫や水辺の生き物を捕まえたり育てたりするなど、普段にはできない自然体験を積んできた。校庭は、１学期とは様子が変わって草のたくさん生えたところがある。そこへ入り込んで虫を捕まえたり、花の咲き終わったオシロイバナの種を集めたり、カリンの実を拾ってくるなど、学校内の自然に目を向けて遊ぶ児童が出てきている。

(2) 学習環境から見た本校の特色

本校は駅近くの市街地にあり、自然がとても少ない。寺社に緑が残され、街路樹や住宅に植えられた草花に、わずかに季節を感じ取ることができるが、子どもたちが自由に虫を取ったり、草花を摘んだり、木の実を拾ったりできる環境はない。そのような地域に暮らす児童にとって、学校内の樹木、草花、虫などの自然は、大変貴重なものとなる。夏の間に茂った草むらには虫がすみ、校庭の周りに植えられたキンモクセイが、すばらしい香りで秋を感じさせてくれる。学年園のヘチマや５年生が栽培しているバケツ稲にも虫が寄ってくる。校庭にいるアリやダンゴムシなども、児童にとっては宝物となる。

(3) 単元のねらいと指導観

本単元は、学習指導要領の内容（５）（６）を受けて設定したものである。身近な自然を観察したり、体全体で、諸感覚を働かせながら自然とかかわる活動を繰り返したりして、季節の変化に気付き、自然と親しむようにすること、自然を利用して遊びを工夫し、みんなで遊びを楽しんで、自分たちの生活を楽しくできるようにすることをねらいとしている。

普段、自然とかかわる体験の少ない児童が、自然に直接触れたり、自然のものを集めたり、友達とともに自然を利用して遊んだりして、自然とのかかわりを十分楽しむことができるようにする。戸外での活動を繰り返したっぷりと行うことによって、秋の深まりにつれて変化する自然の様子、空気や日差しの変化なども体全体で感じ取らせ、自然との親しみを深めさせたいと考える。そのために、校地内で自然や生き物と繰り返しかかわる活動を大切に行っていくとともに、そうした活動を日常生活へも広げていくようにする。そして地域に出かけ、地域に息づく自然を見つけ、人々が自然を大切にしたり、自然との触れ合いを楽しもうとしたりしている様子などにも目を向けさせる。さらに、より豊かな自然と触れ合える校外学習の場を生かし、児童にとって魅力的な木の実を豊富に集めるなど、活動を広げていくようにする。

生活科における環境教育の視点として「直接体験を通して身近な環境に親しむこと」「体ごと環境に触れ合うこと」「特に幼児期・低学年の時期における自然体験を重視すること」「環境へのかかわり方を学ぶこと」が挙げられている。本単元においてこの視点が生かされるよう、次の点を大切にして指導していく。

○　大人のもつ秋のイメージを押し付けることなく、児童自身がとらえる「身近な自然」や、児童が直接触れ合うことのできる「身近な自然」を大切にすることにより、児童の自然に対する愛着や心情を深めていく。

○　「たくさん見つけたい」「よく見てみたい」「育ててみたい」「遊びたい」など、児童がもつ思いや願いが、よりよく実現していくように指導計画を工夫し、自然と直接かかわる活動を繰り返し行って、自然に対するかかわり方を豊かなものにしていく。

○　児童の自然への親しみや愛着の気持ちが行動や発言、振る舞いなどに表現されている様子を、教師が的確にとらえて評価し、児童の自然や環境に対する認識を高めていくようにする。

指導の工夫によって、児童が満足感をもって本単元の学習を進めることができ、本単元のねらいが達成されれば、自然を愛し大切にしていこうとする気持ちや態度、生命あるものを尊重しようとする心や態度が育ち、環境を大切にしていこうとする態度の基礎を培うことにつながる。

３　単元目標

身近な自然に親しんだり、身の回りにある自然のものなどを使って、工夫しながら友達と楽しく遊んだりすることができるようにする。

４　単元の指導計画・評価計画

(1) 単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度

身近な自然と触れ合い、好きな自然のものを集めたり、それらを使って楽しく遊んだりして、進んで自然とかかわる活動をしようとする。

イ　思考・表現

身の回りの自然を観察したり、それらを使って遊びを工夫したりして楽しむとともに、それを表現できる。

ウ　気付き

季節の変化によって自然の様子が変わることや、友達とかかわりながら自然のものを利用して楽しく遊べることに気付いている。

(2) 指導計画の概要と環境教育推進上の留意点　（１６時間）

活　動　計　画		環境教育推進上の留意点
小単元名・ねらい	主な活動（時数）	
(1) 学校で自然を見つけて遊ぼう （６時間） 校内の自然と触れ合い、進んでかかわりをもち､親しみを深める。	○校地内で草花や実、虫などを見つけて遊ぶ。（５） ○見つけた自然物を入れる「秋の宝箱」を作る。（１） ○虫や草花で遊んだ体験をもとに絵をかく。〔図工：２〕	＊児童にとって最も身近な学校を活動の場とし、校内の自然を活動の対象とすることで、児童が繰り返し日常的に自然とかかわることができるようにする。 ＊活動時間を２時間続きにして、児童が、戸外で自然と十分にかかわることができるようにする。 ＊児童が教室内に持ち込んでくる自然のものなどを、効果的に展示したり、日常的にかかわれるよう教室内の環境を工夫したりする。 ＊図工との関連を図り、体験したことをのびのびと表現できるようにして、体験の心地よさを振り返るようにする。
(2) 学校の外でも自然を見つけて遊ぼう （５時間） 校外の自然と触れ合い、観察したり、自然のものを集めたりして、親しみを深める。	○春に行った公園や神社、城址公園へ出かけ、途中の道や公園内で自然を見つけたり、遊んだりする。（４） ○「グリーンセンター」で自然とたっぷり触れ合い、木の実を拾ったりして遊ぶ。 〔校外学習５〕 ○校外で見つけた自然のことや自然と遊んだことを絵や文にかく。（１）	＊春に行った公園等に再度出かけることにより、季節による変化に気付かせる。 ＊町の中では、人々が自然を大切にしたり、自然を楽しんだりしている様子にも目を向けさせる。 ＊校外学習に出かけ、地域では触れ合うことのできない豊かな自然に十分触れさせる。 ＊戸外での活動を大切にし、体全体で自然とかかわるようにする。日差しや風を全身で感じている児童、自然のものの手触りやにおいなどを、諸感覚を働かせて感じ取っている児童の様子に共感し、より多くの児童に広げていくようにする。
(3) みんなで遊ぼう （５時間） 自然のものなどを利用して作ったり遊んだりして、友達と楽しく過ごし、自然との親しみを深める。	○「秋の宝箱」に集まった自然のものなどを利用して、作ったり遊んだりする計画を立てる。（１） ○作ったり遊んだりする活動をし、楽しかったことを表現する。（４）	＊自然のものを利用して新しい遊びが作り出せる楽しさを十分に味わわせる。 ＊自然のものの特徴に気付いたり、それをうまく生かして遊びを作り出している児童の様子を見取り、評価していくようにする。

５　指導の実際

(1) 第１小単元「学校で自然を見つけて遊ぼう」における活動の様子

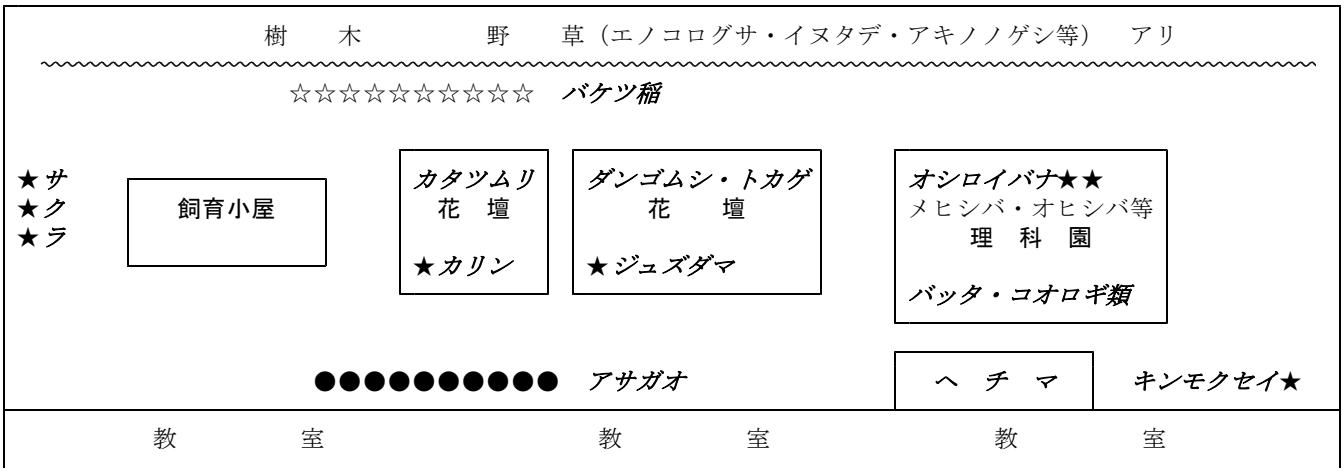
ア　活動の場　～校内の身近な自然を学習環境として生かす～

１年生の教室の横に、広くはないが飼育小屋、学年園、野草園のある中庭がある。２学期初めには、１年生のアサガオの鉢や５年生のバケツ稲が置いてあり、プランターにはヘチマが育っている。そこにチョウやハチ、トンボなどが飛んでくる。植物があると、生き物が集まってくるようになる。

１学期にジャガイモ栽培の終わった学年園は、あえてそのままにしておく。すると、夏の間にエノコログサなどの野草がたくさん生え、２学期には虫のすみかとなる。土のある学年園、野草園の中には、その場所と季節に合った自然が力強く息づいている。わずかな土の上に、様々な植物が育ち、生き物が集まってきているのである。

校外に自然の豊富な場所が得られにくい市街地の学校にあっては、校地内に、意図的に自然が息づく環境を確保しておく必要がある。理科等の栽培計画と連携し、栽培植物を集めたり、野草を自然のままに残しておくなどして、「身近な自然」を保持していくように配慮する。

＜中庭の環境図＞



ここは、児童が安心して自由に自然とかかわれる場所であり、休み時間などにも活動を続けていくことのできる場所である。地域にそのような場があまりない本校の児童にとって、自然とかかわることのできる貴重な場となる。この環境を、繰り返し自然とかかわれる場として有効に活用していく。

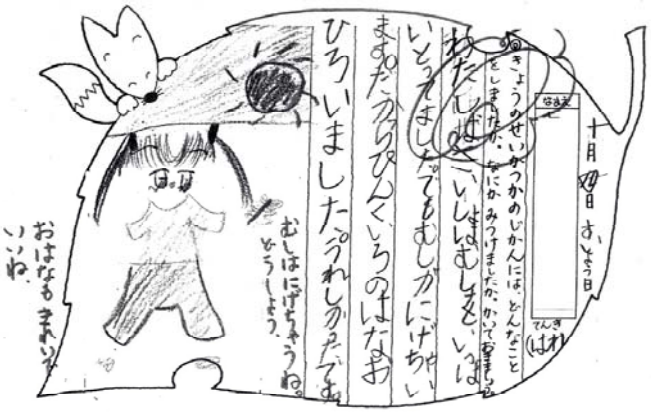
また、この場所を、３年生理科の「昆虫の育ち方」、４年生理科の1年間を通した動植物の変化を学習するフィールドとしても活用していく。すると、児童は１年生から４年間にわたって、様々な形で同じフィールドの自然に繰り返しかかわることができる。生活科における体験や学びが、基礎・基本となって、理科の学習に生きて働くようになる。生活科の学びを上の学年の学習に継続し、さらに発展させていくようにする。

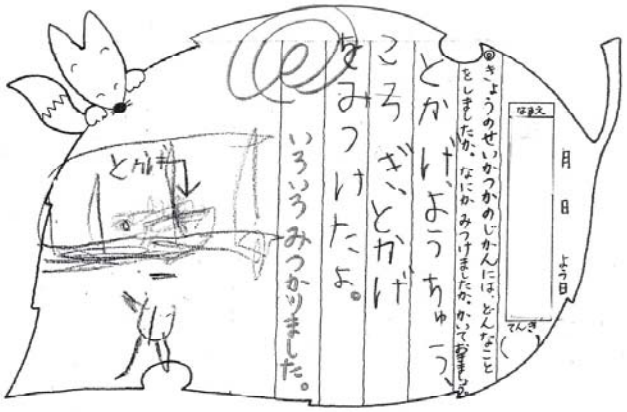
イ　児童の活動と教師の役割　～身近な自然とかかわる活動を繰り返す、活動が広がる～

一見するとそれほど自然が豊富な場所には見えないが、児童は活動を始めるといろいろな生き物を発見し、かかわりを始める。アサガオ、ヘチマ、オシロイバナ、キンモクセイなどの花、カリン、ジュズダマなどの実、オシロイバナや草の種、ダンゴムシ、アリ、カタツムリ、トカゲ、幼虫、コオロギ、数種類のバッタ類などを次々と見つける。すると「取る」「拾う」「捕まえる」「集める」など活動が進んでいく。「○○がいたよ。」「それ、どこにあったの？」などと友達と交流し合いながら、活動はどんどん広がっていく。

児童の活動を促すための環境構成として、中庭にビニル袋、プリンカップなどの容器類、テープ、輪ゴム、楊枝、はさみ、紙類、マジック類を用意しておく。すると、児童はそれらを生かして虫かごを作り、虫を入れてじっくりと観察する、花びらを集めて色水遊びをする、キンモクセイやカリンの香りを楽しめるものを作る、草の穂を集めて箒を作るなど、様々な遊びを展開していく。

＜児童自ら気に入った自然とかかわりを深めていく児童の姿＞





この活動においては、児童が自分の気に入った自然を見つけたり、愛着を寄せることのできる自然と出合うことが最初の大きなねらいとなる。個々の児童の活動は、この単元までの自然とかかわる体験や、すでにもっている自然に対する心情などが大きく影響してくる。一人一人の児童がどのような自然とかかわろうとしているか、活動の様子を見取ることによってつかみ、必要な指導、支援を行うようにしていく。

虫や生き物が好きな児童は、活動時間が始まると夢中になって虫を追いかけ始める。このような児童に対して、教師は、まず見守っていく。児童は虫のいそうな場所を考えながら、もっと捕まえようと進んで活動する。「やったあ、つかまえたぞ。」という虫を捕まえた喜びに、教師は十分に共感する。「このバッタはね…。」という児童の話を聞き、振り返りカードや活動の様子、児童との対話を通して、児童のバッタに対する興味・関心がどのような方向に向いているかをつかんでいく。そして、児童の更なる願いが実現していくように、また活動が深まるように指導していく。環境構成の工夫として教師が用意した材料などが活動のきっかけとなり、児童はそれらを活用して捕まえた虫を入れる入れ物を作ったりして工夫をしていく。「虫を育ててみたい。」という願いをもつようになった児童と共に、虫の本やパソコンの情報などを探したり、調べたりして、よりよい世話の仕方ができるようにしていく。

自然とかかわる体験の少なかった児童は、なかなか積極的な活動が始まらない。外で活動すると汚れるからいや、土や草の感触が好きでない、虫や生き物が怖くて草むらに近づけないなどの理由から、体全体で自然とかかわることが困難なのである。そこで、仲良しの友達と一緒に活動させたり、教師が共に活動したりすることで、少しずつ自然とのな

じみを深めていくようにさせる。そして、教師は、その児童がどのような自然に関心を向けるか、どのような自然となら親しんで活動をしていこうとするかを見極め、児童が自ら選んだ活動を支えていくようにする。

生きている虫を自分の手で捕まえた喜びは大きいものである。中庭での虫取りの体験後、児童は絵に生き生きとその感動を描き表していた。「虫を飼ってみたい。」という気持ちが出てきて、飼い方を調べたり、虫が喜ぶように飼育ケースの環境を工夫するようになっていった。休み時間ごとに飼育ケースを見に行き、虫と触れ合ったり、大切にしたりしている姿が見られた。

(2) 第２小単元「学校の外でも自然を見つけて遊ぼう」における活動の様子と教師の役割

身近な自然と触れ合う活動を繰り返すことにより、季節の変化に自ら気付いていく

春に出かけた学校近くの公園へ再び出かける。道の途中には、街路樹のケヤキが色づき始め、ハナミズキが実を付けている様子を見ることができる。道沿いには地域の方々が育てている花のプランターが続き、チョウやトンボが飛んでいるのを見かけることもある。

教師は、児童が自然を見つけて発した言葉やつぶやきを聞き取り、十分に共感したり、称賛したりする。自然に進んでかかわろうとしている行動などを見取り、その児童のこだわりや気付きを読み取るようにしていく。よい発言や気付きについては、他の児童にも投げかけ、共有していくようにする。すると、児童は普段何気なく通っている通学路にも自然があり、季節の変化が訪れていることに気付いていくようになる。

公園に到着し、遊具で遊んでいると「春に来たときは汗をいっぱいかいたけど、今は涼しいね。」と気温の変化に気付く児童が出てきた。どんぐりの木があり、「あっ、どんぐりだ。」という声に、一斉に児童が集まり、拾い始める。「どんぐりの木があるなんて知らなかった。」という児童も多い。少しずつしか拾えず、「もっとどんぐりがほしいな。」という思いをもつようになる。「神社のところにもどんぐりがあるよ。」という声が上がる。その児童の思いや願いを生かす形で指導計画を展開し、校外へ出かけることにする。

神社へ行くと、公園とは違う形のどんぐりが拾えた。それに着目した児童が「秋の宝箱」の中に新しく仕切りを作り、公園で拾ったどんぐりと神社で拾ったどんぐりとに分けて大切に入れている姿も見られた。教師がこの活動のよさを他の児童に紹介すると、その活動が次々に広がっていき、本で調べるなどして、「どんぐり」にも種類があること、木の名前が違うことなどに気付いていくようになった。

身近な自然と触れ合う活動を繰り返すことにより、自然に積極的にかかわる姿勢が育つ

「グリーンセンター」に出かけると、園内は豊富な木々や草花であふれている。秋の日差しを浴び、秋の風に吹かれながら、体全体たっぷりと自然に触れ合うことができる。地域では味わえない価値ある体験となった。

どんぐりの木のところへ行くと、台風が通過した後でもあり、大量のどんぐりが地面を埋め尽くしていた。児童は「わあ。」と歓声を上げると、次々にしゃがみこみ、夢中になってドングリを拾い始めた。「こんなにあったよ。」「ぼうしがついてるのがあった。」とうれしそうに見せに来る。

「すごおい、どんぐりがいっぱい。」

学校の中庭で虫取りの楽しさを味わった児童は、「グリーンセンターへ行ったら、もっと虫を捕まえたい。」との願いをもち、自ら進んで虫を入れる入れ物やミニ図鑑を持って行った。目を輝かせながら虫を追い、りっぱなバッタを捕まえることができた。図鑑で名前を調べ、じっくりと観察し、満足感にあふれた表情であった。

「やった！
ぼくの虫だよ。」

(3) 第３小単元「みんなで遊ぼう」　～自然に愛着を感じながら、自然とのかかわりを楽しむ児童の姿～

身近な自然と触れ合う活動を繰り返し、活動の場を少しずつ広げて様々な自然と触れ合う体験を重ねてきた児童は、それぞれ自分の気に入った自然を見つけ、愛着をもつようになっていった。また、それらの自然に進んでかかわったり、自然と一体になって遊ぶ姿が見られるようになった。第３小単元の活動では、一人一人が自分の身を飾るものを作ったり、遊ぶものを作ったり、自然のもののよさを生かして作ったり遊んだりして、活動を楽しむことができた。

「すてきでしょ。次はぼうしをつくりたいな。」

「わあ、気持ちいい。
葉っぱのベッド、
いいにおい。」